

# やまなみ

VOL. 13  
2014年5月17日発行

## CONTENTS

p1	弘明寺校舎				
p2	この3年を振り返って	附属横浜中学校同窓会	会長	吉田	守人
p3	教育現場における革新と承継とは	横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校	校長	加藤	圭司
p4-6	我が附属、同窓会、そして愛しの野球部	附属横浜中学校同窓会	初代会長	新井	康友
p6-10	校歌（附属小、附属中、光陵高校、横浜国大）				
p11	校歌って素敵！（伴奏CD作成記）	第13期生（下井田博子）	声楽家	青山	愛
p12	雲居先生の思い出	第19期生（旧姓杉山）	東京音楽大学講師	富田	とみえ
p13-14	写真に支えられて生きる	第19期生		小滝	真一
p15	治田先生が新しい本を出されます	第15期生		伊東	通
p16	立野校舎				



同窓会

横浜国立大学教育人間科学部  
附属横浜中学校 同窓会  
〒232-0061  
横浜市南区大岡2-31-3  
☎ 045-742-2281  
ホームページ  
<http://www.fuchu.sakura.ne.jp>



▲2006年当時の弘明寺校舎（校長室所蔵）

# この三年を振り返って

横浜国立大学教育人間科学部  
附属横浜中学校 同窓会会長 吉田守人



▲左 現会長 吉田守人 右 第5代会長 矢島孝一郎

今年の三月に第六五期生が同窓会に加入して、その数八〇〇二名を数えるに至りました。私も蝶間林前校長が本校に就任した時からですので、もう六年目となります。「やまなみ十二号」で抱負を述べたのですが、なか

なかなと思うようにはいきませぬ。ただ中学校、PTA、後援会には同窓会の存在価値を高く評価して頂いていることが何よりです。この「やまなみ十三号」で皆さんに知ってもらいたいことを簡潔にまとめてみました。

今後は附属横浜中学校創立七十周年に向けてコツコツと活動していきたいと思っています。

## ○小滝先輩に感謝!

私が会長職を務める前からですが、同窓会の総会、忘年会その他の記念行事にはいつも参加して、なおも写真撮影もしてもらっていただき感謝しています。参加者の写真を撮られた後にはその写真を各々の方々に送付されていることにはびっくりしました。今後はホームページの活用を再度検討して、みなさんにも同窓会の活動を写真で披露できたらいいなと考えています。

## ○附属横浜中学校校舎の歴史

昭和二十二年に附属横浜中学校が創立されたのですが、私が入学した時は鉄筋コンクリート造三階建ての校舎でした。創立時から数年は教室を確保することにはいへんご苦労されたとの記録があり、後述の新井初代同窓会長も述べている通りです。「やまなみ十二号」の河地先生の記事を併せて読んでいただくことをお勧めいたします。

そして昭和五十六年に横浜国大工学部の常盤台への移転に伴い、附属横浜中学校も現在の弘明寺に校舎を移してきました。今年には第六十八期生が入学してきました。この長い年月を校

舎の写真で振り返ってみて、みなさんに附属横浜中学校の伝統を感じてほしいと思います。

## ○校歌を歌い易くするために

平成二十四年に十三期生の下井田博子(青山愛)先輩から校歌伴奏のCD作成の依頼がありました。皆さんは各期ごとに同窓会を多く開いていることは聞いていました。少しキーが高いので、伴奏の録音を録り直して、これを同窓会幹事に配る計画を立てました。当時中高一貫教育で話題になっていたのが、附属横浜小学校、神奈川県立光陵高校の校歌と横浜国大生歌を一枚のCDに収め、小学校、中学校、高校に配りました。この録音は附属横浜中学校音楽室を借りて行いました。学校関係者の皆さんには大変感謝しております。また伴奏を弾いてくれた伊藤さん(五十六期生)とプロデュー

スしていただいた下井田先輩にも感謝いたします。このCDは各期の幹事に配布してありますが、入手されたい方は申し出てください。また、「やまなみ十三号」に校歌の楽譜を掲載しましたので、これも利用して頂ければよろしいかと思

います。

## ○中学校を活用しよう

昨年、第五十四期生の関澤さ

んから働きかけがあり、「杉浦君・友池さん結婚」のためのビデオ撮影を中学校内で行いました。準備段階での打ち合わせでは先生方に過分の配慮を頂き、五十四期生の皆さんには満足のいく撮影になったことでしょうか。(写真①) 仲介役として同窓会が中学校とのパイプ役を果たしたことは、今後同窓生の皆さんにとってもうれしいことだと思っています。大いに活用してください。

ここに記述したこと以外にも、図書室の充実化を図るため書籍の寄贈を続けていることやパソコンの寄付など附属横浜中学校の影の応援団として活動しています。今年と同窓生全員による総会が六月に控えています。皆さんの気づかれたことやご意見があれば同窓会まで届けて頂くようお願いいたします。



▲写真① 54期生の皆さん



# 教育現場における革新と承継とは

横浜国立大学教育人間科学部  
附属横浜中学校 校長 加藤 圭司

平成二十五年四月から、附属横浜中学校で校長職を務めさせていただいております。どうぞ宜しくお願いいたします。

同窓会の皆様には、日頃から母校の教育に關しまして温かいご支援とご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

さて、本校第六十五期卒業生百三十四名は、三月八日(土)に卒業式を終え、元気に巣立って行ってくれました。そして、四月には、第六十八期生を迎えることとなります。開校七十周年という節目も、もうすぐそこに迫つて来たというところででしょうか。

ここでは、附属横浜中学校の近況を紹介しながら、私が本校に着任してから感じていることについて、述べさせていただきますと思います。

本校は、平成二十三年度から

教育現場におけるICT機器の活用に関する国の実証研究である、総務省「フューチャースクール事業」ならびに、文部科学省「学びのイノベーション事業」の指定を受け、これに携わってきております。これらの事業の予算規模は膨大で、全生徒に一人一台のタブレットパソコンと校内における無線LAN環境の整備、全教室に七十七インチの電子黒板の設置など、まさにインターネット・スクールと言える環境が整備されました。

当然のことながら、このような学習環境の変化は、授業そのものに革新をもたらしています。教室内の自分の机上からインターネットの世界に接続できたり、電子黒板は、瞬時にクラスメイトの学習状況を映し出してくれたり、というように。

一方、従来からネット環境の安易な位置づけによる負の効果や懸念する声もあり、本校では、ICT機器を用いるからこそ必要と判断される「自分の手で書く」行為や「本物に触れる」活動を、先生方も生徒自身も意識し吟味するようになってきているところです。

バーチャル、リアルを問わず多様な経験・体験を通して、生徒一人一人がじっくりと考え、本

質を見抜いていく(＝判断する)過程を大事にする学習は、これからの社会を生き抜いていくために必要な基礎的な力の育成につながるものだと思います。そしてそれは、本校が掲げている「リテラシー」の育成と言い換えることもできるでしょう。

社会人として必要な基礎的な力の育成は、時代を超えて不易であり、承継していかなければならない学校の役割であります。

ICT機器の活用が授業を変え理解の深まりをもたらし、であれば、それは、社会人として必要になる基礎的な力とともに、学ぶことの楽しさを感じさせることにつながっていくはずで、まさに、革新が伝統と融合する中で、承継すべき新たな、そして確かな伝統を創り上げる営みが、今の附属中学校の中にあるのではないかと、日々感じながら過ごしているところです。

これらの取り組みを通じて、地域の方々に信頼される学校づくり、附属としての使命をまっとうできる学校づくりを目指し、教職員の力を結集して取り組んでいきたいと思っております。

今後とも附属横浜中学校の発展・充実のためにお力をお貸しいただきますよう、お願い申し上げます。



# 我が附属、同窓会、 そして愛しの野球部

附属横浜中学校同窓会 初代会長 新井康友



今回お誘いを受け、友と過ごした附属小学校、中学校、そして同窓会のあれこれを記し残しておくこととしました。

## 一・附属小学校と疎開

私は純粹の附属人ではない。昭和十六年四月間門小学校一年生。十二月太平洋戦争勃発。三年を経て、昭和十九年四月附属小学校四年に編入学。その八月に中郡秦野町（現秦野市）に集団疎開。我々四年生は天徳寺本堂両脇の畳の部屋に男子組、女子組に分かれて集団生活を開始。

初めての親元を離れての生活ではあったがさみしくはなかった。しかし食糧不足は深刻で粉の胃薬「ソキン」を皆で飲んで空腹をまぎらわせた。又、勝手に畑のサツマ芋を掘ってきて（これって盗みかな）、教生（今の教育実習生）の先生に茹でてもらった事も。先生も「このお

芋どうしたの」とは聞かなかった。お寺でやった夜の墓地の肝試しウォークは怖かった。別々のルートを歩いた友と、お墓の角でぶつかった時は思わず「ギャー！」と悲鳴。辛かった集団疎開も今となつては懐かしい思い出。

昭和二十年春からは食事状況を心配した親の手配で隣の西秦野村の農家の一室に弟（当時附属小三年）と二人で縁故疎開。やさしいオジさんオバさんに木を切つて薪にするのを教えてもらつたり、草刈りの手伝いをしたり。丹沢のふもとでまさに山紫水明。学校帰りに地蜂の巣を見つけ、掘つて幼虫を捕まえ、「お前も喰えよ」で口に。気持ち悪いし、おいしくはなかった。でも短い間だった村での生活は本当に楽しかった。「夢は今もめぐりて、思い出さるふるさと」

やがて八月十五日、昭和天皇のラジオ放送は農家の縁側で近所の人達と一緒に聞いた。「そうか耐え難きも耐えなければいけないんだな」と納得。

十月ごろ横浜に戻り（我が家は焼けず無事だった）、十一月附属小へ五年生で復学。しかし男女二クラス約八十名のうち、学校へ戻ってきたのは僅かに三十名弱、家が焼けて横浜に戻れ

なかつたり、当時学校も校舎が不足して戻るのが少し遅れると「もう定員一杯で無理です」と断られた友も沢山いたと聞く。このあとの五、六年生の間は混乱期であまり学校生活の記憶がないが、六年生の時、中区の体育大会のような催しがあり、我が附小チーム（稲田、新井、西田、福田）は四〇〇米リレー決勝で四位になっている。

## 二・附属中学校

その後我々附属小三七期は昭和二十二年三月無事卒業。ところが新制中学として創立された神奈川師範学校女子部附属中学校の一年生になったのは同年五月、何だ？四月は？四月中は附属小学校高等科在学だったそう。

中学生（三十名）にはなつたものの先生は少なく、校舎も無く教科書がこれまた傑作。ザラ紙に刷られ折り畳まれた物を一人ずつ渡され、自分でナイフで切り離し頁を揃え隅に穴をあけヒモで結んで出来上がり。

教室は師範本校舎講堂舞台裏の狭い控室。両側に机を詰め込み間の通路は幅五センチくらい。一旦坐つてしまえば授業終了まで身動きが取れない状態。それでも天皇陛下が「忍び難きも忍べ」と言つたんだから仕方

ないか、とじつと我慢の子。

二年生になって新たに十名の仲間が加わり計四十名。ここで校庭隅のマッチ箱校舎に。但し教室のそのものは下級生に占領され、我々はその廊下に机を並べて勉強。三年生になってやつと本校舎三階に一室を与えられた。我々が昭和二十五年三月に卒業した後、四月に附属中学名物、河地先生が着任。三年生になった二期生を担当された。一期生は昭和三十一年に出来た校歌を知らず、昭和五十六年の弘明寺移転も無縁。全ての思い出は立野の丘に詰まっている。立野の丘よ永遠なれ！

### 三・同窓会設立へ

私が最初に附属中同窓会を創ったのは大学二年生か三年生（昭和三十年か三十一年）頃。大学生活も少し落ち着いて「そうだ同窓会を創ろう」と思い立って、二代目生徒会長だった野崎君（二期生）に連絡。「オイ、同窓会を創ろう。手伝ってくれ」「判りました」同期の穂苅君、三期生の澤山君にも声をかけ手探りでスタート。学生服で附属中の卒業式に出席し挨拶したりした。後年、河地先生に「卒業式での新井さんの詰襟服姿憶えているよ」と言われてテレ笑い。その後卒業。社会人第一歩が

支店（北海道小樽）だったため、同窓会活動は中断。会も休眠に。何年後、昭和四十年ごろも一度チャレンジ。二回目の同窓会を作ったもののサラリーマンには時間の確保が厳しく消滅。その同窓会が転機を迎えたのが附属中三十周年記念。当時の高木副校長から「もう一度同窓会を作ってほしい」とのご依頼「判りました。やりましょう」と返事。早速二期生野崎君に連絡し「また手伝ってくれ」「了解」いつも頼りがいのある友だ。

この三回目の同窓会設立の基礎となったのが、昭和四十六年作成の附属中同窓会名簿。これは当時河地先生が、この辺で同窓会名簿も作っておいた方が良いのではと考えられ、一年余をかけて完成して頂いたもの。これを支えたのが当時学生であった木野君（十六期）を中心とする若き名簿編集委員たち。当時私は会社業務が忙しく同期の名簿を用意するくらいしか出来なかつたが、河地先生と木野君には大感謝。

この名簿をもとに、三十周年そして第三回目の同窓会発足に向け、河地先生の助言を受けつつ各期幹事名簿を作成。これら幹事達の活躍が記念事業を支え同窓会の基盤を作り、その後の発展の原動力となった。この時

の寄付金で同窓会が講堂の緞帳と演壇の修復を行ったと記憶。

また、河地先生にはその後も同窓会活動に絶大なご支援を頂き、今も特別顧問として顧問会議への出席等貢献して頂いている。この時、同窓会規約も作り直し、会長任期は三年と定めた。これはいつ迄も一期生や二期生が会長に居座ると役員の高齢化が進み、若い人達がついてこれなくなる事を恐れた為で、会長交代を早め若い力を注入する趣旨。

この結果私のおと、二代目野崎君（二期生）、三代目広瀬君（四期生）、四代目石原君（五期生）、五代目矢島君（十期生）迄は三年交代が実現したが、その後円滑に引き継げなくなり、矢島君には十三年の長きにわたる苦勞を強いて申し訳なかつた。この矢島政権のとき、副会長木野、事務局伊東（十五期生）のトロイカの活動で同窓会が大発展し、附属中吹奏楽部に三百万円相当の楽器を寄贈する事も出来た。これは附属中を知り尽くした伊東君が吹奏楽部の窮状に気付き、ある会合で「ねえ新井さん こういう事は無理ですかね」と口を開いたのがキッカケ。

も大活躍。県立音楽堂の確保には七期生新堀君（故人）が骨を折り、寄付金募集には伊東君が奮闘して「おぬしやるのう」と感服。

矢島君のおとは六代目木野君が継ぎ、次の七代目中西君（十期生）も長期活躍でご苦勞をかけた。この時に入会金の増額を実現し、同窓会の財政基盤を確固たるものにする事ができた。そして、今は八代目吉田君（二期生）、同窓会旗も作り絶好調。同窓会の前途は洋々。とはいえ更に充実、発展し続ける為には卒業生全員の協力が必要。

その点、最近の顧問会議（河地特別顧問、歴代会長、長年事務局を率いた伊東君で構成）の出席率の悪いのが気がかり。オイ、みんなマジメに出て来い！

### 四・附属小学校同窓会

三回目の附属中同窓会を発足させた（昭和五十一年）あと、いづれは小学校の同窓会も思つたものの私達の期が三十七期、一期生から三十六期生迄の名簿も無いなかで諸先輩に連絡の取りようもなく、又当時は附属小の卒業生の殆んどがそのまま附属中へ進んでいた状況から、何も同窓会を二つ作ることもないだろうと意欲減退。

しかし其の後、附属小から附

属中へ進む生徒は逐次減少。今や附属小卒業生の半数は他中学校へ進むのが現状。この為もあり附属小から「小学校にも同窓会を」とのお声がかかり十数年前に発足。

但し、組織も無く、何をどう進めたら良いか案も浮かばぬままの一人会長で、入学式、運動会そして卒業式への出席のみでヨチ、ヨチと。

しかし数年前からそれを見兼ねて「お手伝いしましょう」と申し出てくれた附属小六十八期生（附属中三十二期生）の中臣さんの協力を得ている。まだまだ大規模な同窓会総会を開ける実態ではないが、逐次体制も整い、副会長、会計監査にも六十八期生の人材を得て、昨年無事に会長職を中臣さんに引き継ぐことができた。

活動の一端として毎年二月、生徒達の校内作品展に合わせ「ホームカミングデー」を催している。ホームページをチェックしつつ来年は附属中同窓生も是非遊びに来て盛り上げてほしい。

### 五・愛しの野球部

まず文末の古い写真二葉を見てください。

上は我々二年時のユニフォーム、胸のマークは梅の校章（モ



デルは私)、下は附属中三年時のもので、胸のマークはFUZOKU(モデルは私と福田君)。といつても当時、ユニフォーム、ストッキング、スパイク、グローブは全て自前。帽章の「F」と胸のマークのみ学校貸与品。

スタートは附属小六年の春(昭和二十一年)、当時の山本英男先生の「どうだ野球をやりたい人はいるか?」に皆で「ハイ」。勿論私もその一人。「よし、野球

チームを作るぞ」で決まり。先生のご指導で少しずつ野球らしくなり、鎌附遠征も。そのまま進んで附中野球部となる。とはいえ、無い無いづくしの時代。ボールも七〜八個しかなく、打撃練習でのファウルは全て脇のフェンスを越えてガケ下へ。ボールが無くなると練習中止。全員がボール探し。「あつた」との声が続いてボールが集まると練習再開。

私の場合もグローブを買ってもらえず、練習前日、隣の家のお兄さんに「また明日グローブを貸して下さい」。スパイクも無く最初は運動靴。二塁打を打つても少しでもベースを回ると、もう止まらず戻れず立ち往生でアウト。

今の附中野球部の輝かしい伝統は、この立野の丘のグラウンドから始まったことを野球部後輩達は憶えておいてほしい。



横浜国立大学学生歌

作詞 鶴若英子 (学・英語 昭和34卒) (工・機械 昭和37卒)  
 作曲 大根田 遼

moderato

1. み は り か さ あ お う な ー ば ら に、 の び  
 2. ア タ ラ ー シ ー イ ヨ ヲ ツ ク ル モ ノ、 ヒ カ

ゆ き て つ き せ ぬ も の は、 わ れ ら が お も い、 み ど  
 リ ア リ ノ ソ ミ ヲ ム ネ ニ、 ワ レ ラ ノ ミ チ ヲ ク イ

り こ き お か に の ほ り て、 と も に か た ら ん、 と も  
 ノ ナ キ ソ ノ ニ チ ニ チ ヲ、 ト モ ニ ス マ、 ト モ

に ま な ば ん、 わ が ー と も よ  
 ニ マ ナ バ ン、 ワ ガ ー ト モ ヨ

- 見遙かす青海原に  
 伸び行きて尽きせぬものは  
 われらが思い  
 緑濃き丘に登りて  
 共に語らん、共に学ばん  
 わが友よ
- 新しい世を創る者  
 光あり望みを胸に  
 われらの道を  
 悔いのなきその日々を  
 共に進まん、共に学ばん  
 わが友よ

# 附属横浜小学校 校歌

深尾 須磨子 作詞  
高木 東六 作曲

- 一、丘よ 丘よ 明るい丘よ  
呼べばこたえる 富士の山  
立野の丘の 学校だ  
高く 高く 空高く  
歴史のあかり とほそつよ  
我らの附属 我らの学校  
ああ附属 横浜小学校
- 二、丘よ 丘よ みどりの丘よ  
かおるバツジの うめの花  
がんばりつよく 学ぼうよ  
飛んで はねて おおらかに  
光の中を 進もうよ  
我らの附属 我らの学校  
ああ附属 横浜小学校
- 三、丘よ 丘よ 港の丘よ  
丘の ふもとには ひろい海  
まねけば 船もよってくる  
遠く 近く 呼びかわし  
世界の友と 歌おうよ  
我らの附属 我らの学校  
ああ附属 横浜小学校

校 歌

Moderato assai ♩ = 96-100  
普通級編(2C)

深尾須磨子 作詞  
高木東六 作曲

(なつかしく せせらび)

1) 3) か 1 3) か 2 あか りの 赤か  
か 2 3) か 2 みな との 赤か

よ べ ぼ だ ち る ふー じ の ち  
か ね ち る べ っ し の は  
よ 赤 か の ふ も と は ひー あ い

(はつらつと げんか)

だ だ た かく た かく を た かく れ きの かり  
る と ん で は ね て 赤 赤 か ち ひ かり の な を  
と 赤 く ち かく ま ひ かわ し せ か の と も

と ほ そ つ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
す ら づ ら づ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
う た ら づ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー

(P) (F) (C) (S) (C) (S) (C)

と ほ そ つ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
す ら づ ら づ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
う た ら づ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー

(はつらつと げんか)

だ だ た かく た かく を た かく れ きの かり  
る と ん で は ね て 赤 赤 か ち ひ かり の な を  
と 赤 く ち かく ま ひ かわ し せ か の と も

と ほ そ つ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
す ら づ ら づ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
う た ら づ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー

(P) (F) (C) (S) (C) (S) (C)

と ほ そ つ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
す ら づ ら づ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー  
う た ら づ よ わ れ ら の ふ せ く わ れ ら の が ー

(F. S.)

1) 3) 校 校

(F. S.)

1) 3) 校 校



# 横浜国立大学教育人間科学部 附属横浜中学校 校歌

野上 彰 作詞  
高田三郎 作曲

- 一、春淡く 日射はめぐる 丘いくつ  
相模野は 西にはるかに  
歌ごえも みどりにそまる  
手と手を結び 肩を組み  
まっすぐに 光に歩め  
誠実の旗 風になびかせ  
ああ若き花 花
- 二、虹うかぶ 海原遠く 半島の  
山なみに 雲はかりて  
あこがれは 泉とあふる  
手と手を結び 肩を組み  
真実に 光に歩め  
青春の花 胸にかざりて  
ああ若き花 花
- 三、さざんかの 明るき庭に 秋澄みて  
夕映えの 立野の丘に  
ゆたかにも 木の実はみゆる  
歴史をきづけ 生命ある  
新しき 世紀をになえ  
浄らなる眼を 未来にむけて  
ああ若き花 花
- 四、窓をうつ 木枯しすさぶ 朝にして  
白雪の 富士を上げば  
夢多き 三とせを思う  
手と手を結び 肩を組み  
たゆまずに 光に歩め  
創造の火を 高くかかげて  
ああ若き花 花

横浜国立大学教育人間科学部  
附属横浜中学校校歌

野上 彰 詩  
高田三郎 曲

はずんで  
mp  
てとてをわす びかたをくみ まっすぐに ひかりに あゆめ  
てとてをわす びかたをくみ まっすぐに ひかりに あゆめ  
てとてをわす びかたをくみ まっすぐに ひかりに あゆめ  
てとてをわす びかたをくみ まっすぐに ひかりに あゆめ

はるか かなたの くに ありて  
あこがれは 泉とあふる  
手と手を結び 肩を組み  
真実に 光に歩め  
青春の花 胸にかざりて  
ああ若き花 花

さざんかの 明るき庭に 秋澄みて  
夕映えの 立野の丘に  
ゆたかにも 木の実はみゆる  
歴史をきづけ 生命ある  
新しき 世紀をになえ  
浄らなる眼を 未来にむけて  
ああ若き花 花

窓をうつ 木枯しすさぶ 朝にして  
白雪の 富士を上げば  
夢多き 三とせを思う  
手と手を結び 肩を組み  
たゆまずに 光に歩め  
創造の火を 高くかかげて  
ああ若き花 花





▲1960年頃の立野校舎



▲弘明寺校舎前身の国大工学部 校舎全景

# 光陵高校 校歌

石渡 比泥夫 作詞  
三好 明雄 作曲

## 一、光は希望

その光あふれる陵に  
陽に向かう芽ばえの息吹き  
玲瓏大気は澄みて  
若き生命に薫る  
友よ  
青雲の心は高く  
英知未来を探るもの  
光陵高校  
われらここに生きる

## 二、光は力

その光あまねき土に  
伸びゆくは若木のみどり  
光陵 われをつくり  
われら 光陵をつくる  
友よ  
大地深くその根を鍛え  
富士に不屈を誓うもの  
光陵高校  
われらここに 励む

## 三、光は理想

その光きらめく空に  
ひろがるは若人の声  
群青の風にとけて  
未知の星を拓く  
友よ  
新しき世界の夢に  
今日の実りをつなぐもの  
光陵高校  
われらここに 育つ

Moderato con Allegrezza ♩=100

光陵高校の歌

光陵高校の歌

光陵高校の歌

光陵高校の歌

光陵高校の歌

光陵高校の歌

Poco allegretto

# 校歌つて素敵！ (伴奏CD作成記)

音楽家 青山愛 (下井田博子 第十二期生)



▲左 青山愛 右 後輩の伊藤優里さん

数年前に我々十三期の同期会で校歌を歌った時、以前に聞いた原調のCDでは音が高く、四番まで歌うとハーハーゼーゼー。中学生の頃は、難なく歌っていたのでしょうか？  
でも今、改めて歌うと大変素晴らしい詞・曲であるとの声しきり(野上彰作詞・高田三郎作曲)。とにかく、同期会で歌うのに低く移調せねば・・・と、思っていた時に丁度、あるコンサートのステージで桐朋学園音大ピ

アノ科に在学中であった後輩の伊藤優里さん(五十六期生)に巡り会いました。  
事情を話したら快く了解を頂けたので、同窓会長の吉田さんに相談しました。会長も快諾して下さい、さて！と、思っていましたら・・・せっかくだから附属小・附属中・光陵高・横浜国大の全ての校歌を収録！と、相成りました。  
母校の音楽室で、私は指揮監督でピアニストと共に必死の録

音でした。だって、楽譜を調達して頂いたもの高校・大学の校歌は知らないのですから。附属小の校歌(五十周年で制作。深尾須磨子作詞・高木東六作曲)は四十九期生の私達は知らないのですが、娘が附属小に行きましたので楽譜を持っていました。

光陵高の校歌(石渡比泥夫作詞・三好明雄作曲)、これは凄いです。混声四部合唱なのです。後輩の卒業生に聞いたら今でも同期会で歌う時ちゃんと四部で歌うのよ！憶えているのよ！と、言うではありませんか。凄い！

横浜国大のは校歌というより学生歌ですが、これはメロディー譜しかなくて、ピアニストの伊藤優里さんが伴奏付けをして弾きました。

出来上がったCDは、吉田守人同窓会長がそれぞれの学校に伺い贈呈したとの事です。

それにしても、母校の音楽室の恵まれているのには感動しました。音大かしら？と、見紛う設備と音響！私達の頃は立野の校舎で、今の弘明寺の校舎とは無論異なりますが、例えばその頃も普通の地域の学校よりは部屋も環境も良かったですよ！そして、環境もさることながら素晴らしい先生にご指導いただ

けた事は何よりの財産です。今、同級生達と話して音楽に全く関係していない人でも、かなり音楽を知っている！と、実感するのです。

昨年(二〇一三年)七月に、雲居佐和子先生が九十八歳で亡くなられました。先生の音楽の授業が懐かしく想い出されます。校歌の指導で「手と手を結び」の箇所、踊るようにピアノを弾かれ「そこは、こうやって軽く弾むように歌うのよ！」とおっしゃったそのお声は今も鮮明に蘇るのです。改めて、楽譜を見

ましたら、なるほど！そこは、staccatoの記号が付いていました。これからは、そこは弾んで歌いましょう!!この様に、全ての教科で恵まれていたのですよね！音楽以外、良く解らないまま過ごした附属中学時代が勿体なかった「後悔先に立たず」です。

それで、ふと！提案です。雲居先生のお授業を想い出しながら、卒業生の方々に集まる機会が実現したら素敵！如何でしょうか？賛同なさる方ご連絡をお待ちしています。





▲左から 富田とみえ、雲居佐和子先生、山本由起江(加瀬)、酒井京子(山口)

# 雲居先生の思い出

東京音楽大学講師 富田とみえ(旧姓 杉山 第十九期生)



附中の音楽室で、入学したばかりの私達は、まずは校歌を先生に習いました。

先生の附中での音楽の授業は、今思うと音楽大学附属高校に匹敵するようなレベルでした。どんな楽譜を読み、どんなキーでも合わせて下さる先生の素晴らしい伴奏で独唱し、そして宿題では作曲まで経験しました。

先生が授業で曲目解説をしてからレコードをかけて下さって、私たちはたくさんのお名曲に触れて、クラシックの素晴らしさを知ることができました。

そして学校で皆で見に行った映画、サウンド・オブ・ミュージック。後に先生から「あれは私が見て感動し、附属の子供達にも是非見せたい」と思い、校長先生に掛け合せて実現した」と伺い、先生の熱い思いに頭が下がりました。

中学でお別れしてから、先生とは年賀状や演奏会に来て下さった折に批評を頂く、それだけになっていましたが、十二年前私は先生が幼少期を過ごされた文京区小石川に転居した事から、「先生、懐かしい所、是非来てみませんか？」と同期生二人とお誘いし、再会が実現しました。そのとき八十歳を過ぎていらした先生は、生徒さんの思い出

話をされました。先生にはたくさんの卒業生がいるはずなのに、一人一人の生徒について本当に良く覚えていらっしゃって、私達は大変驚きました。私の家ではピアノの前に座って暗譜で校歌の伴奏をされ、私達三人は姿勢を正し校歌を歌いました。あの時は皆中学生に戻っていました。

あの日私達は「先生のお陰で豊かな学校生活が送られて、音楽が大好きになった事に心から感謝しています」と先生にお伝えすることができて、本当に良かったです。又、先生が御高齢なのにご主人様を家で介護された事、お一人になつてからはピアノの練習や読書で充実した日々を過ごされている事などを伺いました。

先生のたゆまぬ向上心や、人に対する温かい愛情、音楽に対する純粹さ、すべてが私達にとっては素晴らしい贈り物でした。私達も先生から学ばせて頂いた心を大切に生きて行きます。雲居先生、本当に有難うございました。



# 写真に支えられて生きる

小滝真一 (第十九期生)



▲瀧沢千恵子さん(28期)と共に(平成24年度幹事総会にて)

## ●はじめに

『やまなみ』の執筆は成績優秀者が書くものかと思っておりますが、正直なところ在校当時はいつも成績ビリを競い合っていた私なので、優秀な先輩や後輩のなかに自分の文章が混ざっても大丈夫か、とても心配です。

人前で写真を撮る時に写真が私の趣味かと思われるようです。それで「何を撮りますか？」とか「機種は何ですか？」と聞かれると答えに窮します。写真の趣味にはテーマやジャンルがありますし、撮影した写真は作品

## ●自動カメラで撮影再開

一九九二年にC型ウイルスによる慢性活動性肝臓炎の診断があり、インターフェロン治療をしてウイルス排除をしたのですが、その薬の副作用による体力低下などで仕事以外は家でゴロゴロして過ごしていました。一九九七年にそのことを反省し、自動カメラを買い、記憶力を補い、外出して体力増強を図ることにしました。それで参加した行事を人前で撮影することを始め、写した方に写真をお渡しするよう心掛けてきました。二〇〇〇年には同期行事でも撮り始めましたし、ミレニアム記念でアトラクションの舞台写真を撮り、すっかり写真を撮る気になりました。(写真①)

## ●デジタルカメラ

出始めのデジタルカメラは高額で、起動が遅く、電池が直ぐ切れ、宇宙的美人に撮れるが、人間味のないグラフィック調に写り、感心しない物でした。二〇〇五年を境にフィルムカメラより安くなり、写真らしく写るので試しに使い始めました。フィルム画像是粉っぽくレリーフのように厚みのあるのですが、デジタル画像是すっきりとした印象です。但し、人物を撮ると肌が黄色くなり、フラッ

シュ撮影すると木像のように写るのには困りました。(この『黄色く』『木像』とは私の感覚で一般的な意見ではありません。)

二〇〇七年に対策(写真②③)を見つけ、現在ではデジタルカメラを使用しています。加えて、カメラ店のフィルムプリント技術がだんだんとおざなりになっている気がしてフィルムを使わなくなりました。また、私はA4より小さいサイズのプリントを主な目的にしていますので、六〇〇万画素のまま使っているうちにメーカーの修理や清掃対応期限が切れてしまいました。最近の高画質カメラに買い替えると、レンズやパソコンを入れ替え撮影法も変わるかもしれません。

間を掛けて見直すことになるので、上手く撮らないと結果が目瞭然に出してしまうという実に怖いものなのです。

三年前に公会堂で部活同窓の音楽会の撮影ということで気楽に出かけたところ、舞台上の人数がだんだん増えて指揮者一名、独唱者四名、楽団二十三名、合唱団四十八名となって一度に百枚以上の撮影が必要となり客席中央で聴衆と対峙するような形になりました。

困ったことに依頼者から撮影状況を前もって伝えていただけないことの方が多く、その場に着いてから起こることに対しては用意した機材で即時対応・最善策をしなければなりません。

当初の狙い通りに記憶に最適で、写真を見ると連想して思い出し易いです。撮影時には状況判断して最善策を探すことで脳が活性化しますし、認知症予防にもなりそうです。失敗を恐れず人前に出ることで度胸が良くなり、撮り損なっても直ぐに気

写真撮影には失敗があります。時にはフィルムを破損したり、カメラが壊れたり、落としたりとかのハプニングも起きました。撮影中は後ろの観客の視界を遮り、作動音で雰囲気損なうこともあります。出来上がった写真は撮影中とは逆にゆっくり時

一昨年、知的・身体障害者の作業所対抗の芸能会の折には、ある組で爆発的踊りが始まり対応調整に失敗して殆んどがボケブレになってしまいお詫びすることになりました。

それで写真のメリットは

それが写真のメリットは

それが写真のメリットは

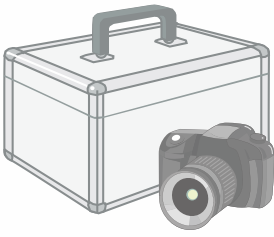
それが写真のメリットは

持ちを切り替え、常に次の瞬間に備え続けます。私の写真はその撮り続ける持久力の産物で、上手に撮りたいと思うものの、我が子を撮る親に勝つというものではありません。

スマホで素晴らしい写真が撮れる時代なので、それぞれ扱い易い物を楽しんで撮っている方が周囲に多くなれば、私は責任感によるプレッシャーが少なく、なにより撮り易くなります。

もっと写真を撮るということでしたが、私が撮った写真はそれぞれの団体や個人に関わる記録なので、残念ながらこの誌面掲載には不向きです。でも、私にとっては一九九七年の一念発起から写真を撮り始めたことで、行動範囲が広がり出会いを多くしたこと、このように『やまなみ』に執筆するという機会をいただけたのが最大のメリットだと思います。

いつも皆様には撮影にご協力いただきましてありがとうございます。



▲2013年12月 幹事忘年会



▲写真① 舞台写真



▲写真③ 色変対応後



▲写真② 色変対応前



▲2009年10月17日 千葉景子法務大臣就任を祝う会

# 治田先生が 新しい本を出されます



伊東 通 (十五期)

私たち十五期生にとつてだけではないでしょうが、大変懐かしい治田先生が五冊目の本を出されます。

先生は今までに、「八景のメルヘン」(一九八八年)、「花のあるメルヘン」(一九八九年)、「五十年目の特別攻撃隊」(一九九六年)、「森の王子の物語―死と存在の意味を問う」(二〇〇五年)と(どれもインターネットで手に入れることができます。『治田成夫』で検索してください)四冊の本を出版されてきました。

今度、五月に文芸社から「意識と主体的存在―反物質主義の人間観―」という題名で文芸社セレクトジョンという文庫本の体裁で出版されます(定価六〇〇円十税)。

この著書について「あとがき」

で先生ご自身が次のように書いておられます。

「物事を合理的に考えようとする、合理的教養人と言っている現代の人々は、心の奥底で、自然科学的な存在観、自然科学の研究に前提されていると思われる唯物論的な還元主義を信じている。その一つとして、意識を含む心的な活動は、脳・神経が生み出したものとされる。

また、全宇宙は意識を持たない偶然の存在となり、その一部である人間も存在意義の支えのないものとなる。こうして人間は、意義の支えのない生と全くの無化である死という、二重の絶望を抱えた存在となる。

その反面、このような人間観に耐えられず、まったく非合理的なオカルト的な思想に走ったり、

科学的な認識を無視する、「宗教的」と称する妄信的な信仰にすがる人びとがいる。これは、知的存在である人間には相応しくない。

やはり、合理性を失わず、存在に値する存在意義を認め、そして物質主義に陥らないような人間観が、人間の本来の在り方に相応しく、また、それに根差しているとも考えられる。本書は、そのための基礎に当たるところを考えて、いくらか体系的に表したものである。こうした第一義の問題に関心をお持ちの方の参考になれば幸いである。」

哲学というのは出来合いの言葉で抽象的に考えることではなく、具体的で切実な問題を問い解決をめざす時に、自分のつかなだ具体的で、ある確かな生き生きとした感じ(ベルグソンなら直観というであろう)を信じて、それを手がかりに粘り強く問い続けることを意味していると思う。これは安易に既成の言葉を積み重ねて組み立てるものなどではなく、逆にその出来合いの意味を取り除いていきながら、その輪郭の柔らかな、しかし確かな手ごたえのあるものを今度は慎重に言語化する作業だと思われるが、先生のこの著作を読んでいるとそのことが実によくわ

かる(もつとも、私は先生の考えを理解できていない訳ではないけれど)。

先生のこの著書を読んでいると、例えば、私の苦手なヘーゲルも実に生き生きとした実感に基づいて動的に弁証法をとらえていることがよく分かった。これは別に治田先生の本意ではないだろうが、私にとっては貴重なことだった。

事象を動的なものとして捉えようとする先生の精密で粘り強いアプローチ、極論を廃し、ある意味で「中道」を目指すようなアタックは、哲学するとはこういうことだという何よりのお手本である。

プロセス自体が哲学なのだ。奇異なことでもなく当たり前のことを粘り強く問い続けることこそが哲学なのである。このことが今の私たちの社会には欠けていると思う。政治経済についてみていて特にそうかんじる。急がば回れという言葉が強く浮かんでくる。

この本は治田成夫という哲学者の「哲学のすすめ」である。そう強く思う。先生は現在、人間であるとはどういうことか、ということと本書の続編を執筆されておられること。先生のご健康を祈ることや切である。





▲1940年頃の立野校舎(校長室所蔵)